

D. H. ロレンスの「死の舟」を読む

—落果と萌芽のイメジャリ

市川 仁

- <目次> はじめに
1. 古い自我への訣別
 2. 死出の旅路
 3. 剣の一突きで自らの命を絶つのではなく
 4. 洪水と漆黒の闇の中で
 5. 曙光
- おわりに

はじめに

ロレンスの旅行記 *Etruscan Places* (1932) の中に “the little bronze ship of death that should bear him over to the other world” (17) の一節がある。1927年4月6日から6日間にわたって友人のブルースターとともにエトルリアの古墳めぐりをしたときに、彼の目にとまったブロンズ製の舟について触れた部分である。死者を死の旅へと運んでゆくこの小さなブロンズ製の舟のイメージは、おそらくその後消えることなく彼の心の中に残ったのであろう。そして、それから2年半後、彼の死の半年ほど前、一編の詩と⁽¹⁾なって結晶した。

晩年、ロレンスはエトルリア人の死生観、なかでも死後の世界に対する考え方に惹かれ、そこに彼の生き方を重ね合わせていた。たとえばチェルヴェテリに残る墓を訪ね、墓室の壁画に描かれている生前の豊かな生活の様子や死出の旅の様子を目にし、また死者とともに安置されていた膨大な量の宝石類や身の回りの品々のことに思いをはせ、エトルリア人にとって死は “a pleasant continuance of life” (19) であり “a natural continuance of the fullness of life” (19) だと彼の目には映った。また “. . . the life on earth was so good, the life below could but be a continuance of it” (*Etruscan Places* 46) とも言っていることから、明るく軽やかで、自由でのびのびとした世界が、現世ばかりか死後の世界へとそのまま続いてもいる、と考えたのである。

全体がI—Xの10セクションに分かれ、107行に及ぶ “The Ship of Death” は、その基底にどこかしら明るさや軽やかさが感じられるのは、ロレンスが見たエトルリア的な死生観が大きく影響し、自分の死期をかすかに予期しながらも、そのエトルリア的な死後の世界観に自らを委ねることで安堵の念を感じていたからかもしれない。

1. 古い自我への訣別

セクション I は次のように 3 つのスタンザで構成され、秋の落葉の場面で始まっている。

Now it is autumn and the falling fruit
and the long journey towards oblivion.

The apples falling like great drops of dew
to bruise themselves an exit from themselves.

And it is time to go, to bid farewell
to one's own self, and find an exit
from the fallen self. (*The Complete Poems* 716)

ここで “autumn”, “falling”, “journey”, “oblivion”, “farewell” などをもとに、秋のイメージから人生の秋、さらにロレンスの死の予感へと発想を移してゆくことは容易である。もちろん死への予感があったであろうし、たしかに彼が人生の終焉を感じているというように読むことも可能である。だが、たとえば1917年に書かれたエッセイ “The Reality of Peace” の中の “the wintry glory of tragical experience to surmount and surpass” (*Phoenix* 675) という言葉を拾って、そこに重ね合わせてみるだけでも、秋への思いがそれだけではないことがわかる。

第1スタンザ1行目の “falling fruit” は肉体の死の象徴でもあるが、むしろロレンスの目に映っていた成熟しきった現代社会全体を象徴するものと考えてもよいであろう。現代社会はすでにそれ以上先に進めないほどに、もう十分に成熟しているのに、それを打破しようとはしない、あるいは打破しようにもそれができないでいるという、その状態を象徴したものともいえ

る。ここで “apples falling” からすぐに思い浮かぶのは、ロレンスが長編 *Women in Love* (1920) の中でバーキンに語らせている言葉である。アーシュラが、人間は “walking flower” (140) であればいい、と言うと、バーキンはその言葉に賛成するものの、実際には現代人は “apples of Sodom” (126) にすぎないと言う。それは

... they won't fall off the tree when they're ripe. They hang on to their old positions when the position is overpast, till they become infested with little worms and dry-rot. (126)

であるからだという。“apples falling” は、まさにバーキンの言葉のエコーともいえよう。現代人は見たところバラ色で申し分なく見えるし、若者も健全そうに見えるが実はその内部は苦く腐敗した屍灰に満ちているのだ、というあまりに独断的なバーキンの主張に対して、嫌悪を感じながらその理由をたずねるアーシュラへの答えである。現代人は、すでに十分に熟したのにつまでたっても木から落ちようとしないリンゴのようなもので、結局はウジ虫がわいて、挙げ句の果ては干からびてしまうのだとも言う。アーシュラならずともそのまま受け容れるには抵抗があろうが、少なくともバーキンつまりロレンスの目には、現代人が閉塞状況に陥っている姿が生々しく映っていたに違いない。

第2スタンザ2行目の “bruise themselves to exit from themselves” はリンゴが熟して木から落ち、果肉が割れて中から出た種子が大地で発芽するイメージと重ね合わせることができる。これはとりもなおさず、人間の死と再生の象徴でもある。つまり、人間もその古い自我を破壊し、そこから抜け出て新たな再生の道を求めよ、というのだ。それは第3スタンザで “bid farewell / to one's own self” と、これまでの自我への訣別をうながし、“fallen self” つまり大地に落ちたその古い自我からの脱出をいざなう言葉からも理解できる。

2. 死出の旅路

セクションIIは、セクションIの第1スタンザ “the long journey towards oblivion” を受けて、そのために “Have you built your ship of death” という問いかけで始まる。

Have you built your ship of death, O have you?
O build your ship of death, for you will need it.

The grim frost is at hand, when the apples will fall
thick, almost thunderous, on the hardened earth.

And death is on the air like a smell of ashes!
Ah can't you smell it?

And in the bruised body, the frightened soul
finds itself shrinking, wincing from the cold
that blows upon it through the orifices. (*The Complete Poems* 717)

大地に落ちた種子はこれからやってくる寒い冬を経験し、その先に新たな萌芽を見るというのだ。“The grim frost is at hand” は、安住していた魂にとっての厳しい冬の到来であり、魂の冷たい死の象徴でもある。そして氷結して固くなった大地には、まるで雷鳴をとどろかせるかのように大音響を立ててびっしりとリンゴが落ちるといふ。“the apples will fall thick, almost thunderous” からは、多くの人びとが人生の秋を迎えて散り落ちてゆくというイメージだけでなく、現代文明が大音響を立てて大地に崩れ落ちてゆくイメージすら思い描かせる。

続く第3スタンザでは散り落ちたリングが死臭・腐臭を漂わせている様子が描かれる。“a smell of ashes”の言葉に続いて“Ah can't you smell it?”とあるのは、予想される自分の死の臭いを確かめようとしているようでもあり、大地に落ちて死ぬということが本当はどんなことなのか理解できるか、と問うているようでもある。

第4スタンザでは1行目で“the bruised body”と“the frightened soul”が対比される。リングは大地に散り落ちて砕け、それまで果肉にあたたかく包まれていた種子がその衣を失い、寒さにおびえる姿を想像すればよいであろう。ここで“the bruised body”は古い自我つまり安住の世界の象徴とっていいであろうし、“the frightened soul”は古い自我の殻に守られた安住の世界から放り出され、おびえ震えている魂のことである。落ちて割れたリングの果肉の割れ口からは情け容赦なく冷たい風が吹きつけてくるといふ。もちろん冷たい風は死の象徴である。

3. 剣の一突きで自らの命を絶つのではなく

セクションⅢは、よく指摘されるように“To be or not to be”で始まるハムレットの台詞のエコーであることに疑問の余地はない⁽³⁾。だがそれよりもむしろここでは、わずか3スタンザ7行の中に“quietus”という語が4回も使われていることに注目すべきであろう。

And can a man his own quietus make
with a bare bodkin?

With daggers, bodkins, bullets, man can make
a bruise or break of exit for his life ;
but is that a quietus, O tell me, is it quietus?

Surely not so ! for how could murder, even self-murder

ever a quietus make? (*The Complete Poems* 717)

人は剣の一突きで自らの命を絶つことで“quietus”を得ることができるのだろうか、と問うのだが、では“quietus”とはなんであろうか。またロレンスはこの語にどのような意味を込めているのだろうか。“quietus”には「とどめ」の意味と同時に「解放」の意味も含まれている。つまり、自らの古い自我にとどめをさし、解放されて再生し、新たな生を生きる、という「とどめ」=「解放」の二重の意味を持っていると考えていいであろう。セクション I・II で、新たな生を生きるために古い自分に別れを告げ、死の舟を造るよう*いざなっているのだが*、剣の一突きで己の命を絶つことによって古い自分に別れを告げることができるのか、新たな生命の出口となる傷口や割れ目を作ることができるのだろうか*と問っているのだ*。だが、自ら命を絶つことによる新たな生への解放は成就しない、と繰り返し述べる。第3スタンザで“Surely not so!”と力を込めているのは、単に死ねばいいということではない*ということを確認するためである*。秋に果実が熟して自然と大地へと落ちて死を迎えるように、人間も時が満ちるのを待つべきだという。

ここでまた思い出されるのは、“The Reality of Peace”の中で、サフォーやエンペドクレスの自殺を例に挙げ、それが剣の一突きによるものではないものの、このような形で死んでゆくことが、必ずしも古い自我を破壊し新たな生を生み出すための創造的な勇氣ある行為ではないことを執拗に述べている一節である。

Sappho leaped off into the sea of death. But this is easy. Who dares leap off from the old world into the inception of the new? . . . Who dares to perish from the old static entity, lend himself to the unresolved wonder? Who dares have done with his old self? . . .

. . . Empedocles ostentatiously leaps into the crater of the volcano. But a living man must leap away from himself into the much more

awful fires of creation. . . .

We must *choose* life, for life will never compel us. Sometimes we have even no choice ; we have no alternative to death. Then, again, life is with us. . . . (*Phoenix* 673)

引用の最後にある “we have no alternative to death. Then, again, life is with us.” は逆説的な表現ではあるが、まさに、果実が熟して大地へと落ちてゆかざるを得ないような状態になったとき、つまり、人間も必ずしも年老いてではなく、時が満ちて成熟の時期を迎えたとき、それは単なる死ではなく新たな萌芽のための死であるというのだ。

次のセクションIVでは、“quiet” について語ろう、という呼びかけで始まる。

O let us talk of quiet that we know,
that we can know, the deep and lovely quiet
of a strong heart at peace!

How can we this, our own quietus, make? (*The Complete Poems* 717)

ここで使われている “quiet” と “quietus” という二つの語もやはり「古き自我の死とそこからの解放」の意味で使われていることがわかる。また第1スタンザの3行目では、“a strong heart” が平安に満ちて深くすばらしい静寂に包まれている状態をうたっているが、この場合の “a strong heart” は “The Reality of Peace” の中で “sublimier courage” (*Phoenix* 671) と呼んでいるものと考えてよいであろう。つまり自殺をする勇気ではなくて、自分の意志と自己主張に代表されるこれまでの古い自我を未知なるものに委だね、“quiet” あるいは “quietus” の状態を獲得するための勇気である。ではそのためにはどうすればよいのか。死の舟を造れという。

次のセクションVではふたたび死の舟を造り、忘却への長い旅に旅立てと呼びかける。ここでの死は、剣の一突きで瞬時に死ぬことではない。第1スタンザの“the longest journey”が示しているように、既存の自我を捨て去ることは非常に困難であり、それゆえに長く苦しい旅のようなものだという。

Build then the ship of death, for you must take
the longest journey, to oblivion.

And die the death, the long and painful death
that lies between the old self and the new.

Already our bodies are fallen, bruised, badly bruised,
already our souls are oozing through the exit
of the cruel bruise.

Already the dark and endless ocean of the end
is washing in through the breaches of our wounds,
already the flood is upon us.

Oh build your ship of death, your little ark
and furnish it with food, with little cakes, and wine
for the dark flight down oblivion. (*The Complete Poems* 717-18)

第2スタンザでは、古い自我から新しい自我へと再生するために長く苦しい死を体験しなければならないと繰り返す述べる。さらに第3、第4スタンザでは“already”という語が繰り返されて、4回も使われている。これは、文字通り「死」がすでにすぐそこにまで迫っているという警告であると同時に、この詩の冒頭で謳われた“Now it is autumn”を受けて、われわれの生命にとっての秋がすぐそこに来ていることへの自覚を促すためでもある。だ

が古い自我から新しい自我へと生まれ変わることは困難なことであり、ひどく痛みを伴うことだという。したがって第3スタンザの“cruel bruise”は、これまで安住していた魂にとっては死が残酷である、ということを行っている。

続く第4スタンザの“flood”はもちろんノアの洪水をイメージさせるが、それは私たちを押し流してゆく死の洪水であり、洪水により一掃されることで新たな世界に生まれ変わるという意味で再生の象徴でもある。“the flood is upon us”はもしかしたら、自分の死期の接近を感じていたロレンスの心境が投影されているのかもしれない。ここでは、“ship of death”は当然ノアの方舟をイメージしていると見てよいであろうし、それはもちろん、とりもなおさず再生の象徴でもある。

4. 洪水と漆黒の闇の中で

セクションVIではわれわれの死と崩壊の様子が語られる。

Piecemeal the body dies, and the timid soul
has her footing washed away, as the dark flood rises.

We are dying, we are dying, we are all of us dying
and nothing will stay the death-flood rising within us
and soon it will rise on the world, on the outside world.

We are dying, we are dying, piecemeal our bodies are dying
and our strength leaves us,
and our soul cowers naked in the dark rain over the flood,
cowering in the last branches of the tree of our life. (*The Complete Poems* 718)

第1スタンザ1行目の“timid”は、その住処である肉体を死の洪水に洗われて現在の安住の生活を脅かされ、既知の世界から未知の世界へと連れ去られようとしている魂のおびえと必死の抵抗を暗示している。だがこの洪水の流れはだれも阻止することができず、また拒むこともできないものであり、われわれの内部ばかりか外部をも襲って全世界を覆ってしまうという。ここにはもちろん、神が自ら創造したものをすべて、雨を降らせ洪水を起こすことでこの地上から抹殺するという、聖書のイメージが反映されている。⁽⁵⁾ 第2、第3スタンザとセクションVIIの第1スタンザで“dying”が繰り返し使われているが、これは次第に生命が失われてゆく姿だけでなく、死んでゆく以外に道はないのだということを強調するためであろう。

第3スタンザでは、魂の安住の家であった肉体が、降りしきる雨と洪水の中で弱ってゆき、そのため魂は自分を守ってくれるものを失うことを怖れて、おびえ声を上げながら生命の木に必死にしがみつこうとしている姿が表されている。

セクションVIIはこの詩の中で25行という最も多くの行数が与えられている。ここでは死の舟に乗った忘却への出帆を描くとともに、費やされた大量の言葉が降りしきる雨と洪水を象徴し、この詩のクライマックスとなっている。

We are dying, we are dying, so all we can do
is now to be willing to die, and to build the ship
of death to carry the soul on the longest journey.

A little ship, with oars and food
and little dishes, and all accoutrements
fitting and ready for the departing soul.

Now launch the small ship, now as the body dies

and life departs, launch out, the fragile soul
 in the fragile ship of courage, the ark of faith
 with its store of food and little cooking pans
 and change of clothes,
 upon the flood's black waste
 upon the waters of the end
 upon the sea of death, where still we sail
 darkly, for we cannot steer, and have no port.

There is no port, there is nowhere to go
 only the deepening black darkening still
 blacker upon the soundless, ungurgling flood
 darkness at one with darkness, up and down
 and sideways utterly dark, so there is no direction any more.
 And the little ship is there ; yet she is gone.
 She is not seen, for there is nothing to see her by.
 She is gone ! gone ! and yet
 somewhere she is there.
 Nowhere ! (*The Complete Poems* 718-19)

押し寄せる洪水に象徴される死に抗うことはできないのだから、素直にそれを受け容れ、死の舟に己の魂をまかせて死の旅へと旅立てと言う。第2スタンザでは、死出の旅に向かう魂への供え物について語られ、第3スタンザにも“food”, “little cooking pans”, “change of clothes”といった言葉が見えるが、それもやはり死後の世界でも現世と同じように暮らしてゆくための供え物である。同じ第3スタンザに“fragile soul”とあるが、これはセクションVIで描かれた“timid soul”と同じで、“fragile”には赤子のようにもろい魂が感じている未知の旅への不安が込められている。さらに第4スタン

ザの“small”もやはり“fragile”と同じように魂のもろさやか弱さを表している。また“fragile ship of courage”では“fragile”と“courage”という一見矛盾するように見える言葉を使っているのだが、それは頼りない危なげな舟ではあるが、もろくはかない魂が再生を確信して、そこにきっぱりと自らを委ねようとする勇気を表している。これは死への信頼であり、それは“The Reality of Peace”で語られている“pure faith is the only security”(*Phoenix* 670)に通ずるものである。さらに、“we cannot steer”とあり、これは舵を取ることができないという文字通りの意味だけではなく、死を信頼すればあえて舵を取る必要もないということを意味している。これこそ魂の枯死を防ぐ唯一の手段なのだというロレンスの思想が表れていると見てよいであろう。

この第3スタンザではまた連続して3行、“upon”で始まる行を続けているが、再生のためにはこの死の海をこそ進んでゆかねばならないということの強調である。またそれは洪水に襲われて一面黒々と果てしなく広がる死の海を進んでゆく舟の進行のリズムのようにも聞こえるし、その後“still”がくることで、舟が暗闇の中をどこに行くともしれず漂い流れてゆく情景が目に見えぬ。

第4スタンザでは2行目から5行目にわたって暗黒がなおいっそう暗黒を深めてゆき、“soundless, ungurging flood”に表されているように、洪水が音を立てることもなく漆黒の闇の中で静かにじわじわと迫り来るイメージをつくりあげている。静謐な死の闇の中では、上も下も、右も左もなく、したがって方向もなくなってしまう。

6行目には“the little ship is there ; yet she is gone”, さらに7-8行目には“*She is gone ! gone ! and yet / somewhere she is there.*”とここでも一見矛盾する表現が使われている。そこにありながらそこになく、そこにはいないがどこかにいる、というロレンスのこの言葉には、ちょうど野の草が踏みしだかれて消えてしまったように見えてもいつの間にか芽を出すように、たとえ滅びようともその中核にある生命の源泉は死なずに残り、新たな

生命として成長してゆくのだという思いが表われていると見てよいであろう。それは、ロレンスがエトルリアの死者の彫像が持つ円形の“mundum”を“the plasm . . . remains alive and unbroken to the end” (*Etruscan Places* 36) とか“the eternal quick of all things” (*Etruscan Places* 36) と呼んで、死んでしまうことのない生の核としたことに通ずるものでもある。

セクションⅧでは、場面がなおいっそう暗くなってゆき、まったくの暗黒と化す。これはすべてのものの死を表す。前のセクションでは大量の言葉が費やされ雨と洪水のイメージを作りあげていたが、語数が減ることで、あたりが静まり、すべてが死に絶えてしまった効果を出している。この詩全体をひとつのシンフォニーとしてみれば、このセクションはクライマックス後の静けさを取り戻した部分とも読める。

And everything is gone, the body is gone
completely under, gone, entirely gone.
The upper darkness is heavy on the lower,
between them the little ship
is gone
she is gone.

It is the end, it is oblivion. (*The Complete Poems* 719)

ここでは31語中“gone”が6回使われている。これによってすべてのものが洪水に流されて闇の中に流れ去り消えてしまった、というイメージが強調される。すでに述べたように、このセクションでは言葉が少なくなり、次第に闇の中に消え去る様子が音声的にも感じられ、音声のフェードアウトといってもよいほどである。第2スタンザが1行で終わっているのは、すべてが消えてしまったという効果を与えるためであろう。それだけではない、最後の1行に余韻を持たせることで、新たな魂の誕生の前触れを感じさせます

るのだ。⁽⁶⁾

5. 曙 光

セクションIXはまったくの暗黒の死の闇の中から、再生を象徴する曙光がかすかに射し始める場面で始まる。

And yet out of eternity, a thread
separates itself on the blackness,
a horizontal thread
that fumes a little with pallor upon the dark

Is it illusion? or does the pallor fume
A little higher?
Ah wait, wait, for there's the dawn,
the cruel dawn of coming back to life
out of oblivion.

Wait, wait, the little ship
drifting, beneath the deathly ashy grey
of a flood-dawn.

Wait, wait! even so, a flush of yellow
and strangely, O chilled wan soul, a flush of rose.

A flush of rose, and the whole thing starts again. (*The Complete Poems* 719-20)

暗黒の彼方から一条の光が射してくる。もちろんこれは夜明けの光の象徴であり、消えずに残り、ふたたび輝き出した生命のかすかな輝きを表す。

暗黒の中にかすかに煙るかのごとく見える青白い一条の光は、まだ幻影であるかのように見えるという。そして“Is it illusion?”とそのかすかな光を確認しようとする。それが少しずつであれ本当に上っているのだろうかと問うている。それは、再生はしたが、にわかには信じられない気持ちを表すものでもある。そして続いて“Ah wait, wait”と呼びかける。ロレンスはここで待つことを教えているのだ。それは、意志の力でやみくもに進んでゆくのではなく、自然の大きなリズムに身を委ね、時機がくるのを待つこそ、みずみずしく生きてゆくことができるのだというロレンスの思想を反映したものである。⁽⁷⁾

ところでここで使われている“the cruel dawn”という表現は何を表すのだろうか。再生の明るい夜明けに対立するような“cruel”をあえて使ったのはなぜであろうか。それは“oblivion”つまり安らかな死からたたき起こされ、ふたたびさまざまな苦しみを味わう生を生きてゆかねばならないという意味での“cruel”と読んでよいであろう。これはまた、*The Man Who Died*の中で死んだ男が生き返って感じた「嘔吐感」にも通じるものである。⁽⁸⁾そこでは、死に安住していた男が、残酷にも安眠を破られ、無理矢理目覚めさせられることで嫌悪感＝嘔吐感を感じるのだが、それは死に安住することを許されず、ふたたび困難や苦痛に満ちた生を生きてゆかねばならないこと、ないしは人間社会に対する嘔吐をもよおすような嫌悪感の表れとってよいであろう。

第3スタンザでふたたび“Wait”を繰り返し、第4スタンザでもまた“Wait”を繰り返す。このように繰り返し待つように呼びかけることで、決して急ぐことなく、再生した生命がおのずと育ち熟してゆくのを待つように促すのだ。

第4スタンザ、第5スタンザでは、青白い色が次第に黄色に変わり、バラ色へと変化してゆく。もちろんこれは死に絶えたはずの冷たく青白い魂が再び生命を帯びて血が通い始め、バラ色に輝き始めることの象徴である。そして“the whole thing starts again”とって生命の再生と、一からの出発を

⁽⁹⁾
うたう。

最後のセクションXには、喜びに満ちた軽やかな生命のリズムが感じられる。洪水が引き、そこには再生した肉体が現れ出る。ここで “worn sea-shell” は、“strange and lovely” とあることから、摩滅したというネガティブなイメージよりも、砂で磨かれて美しくつやつやと輝く貝殻のイメージを表し、みずみずしい肉体再生の象徴と考えた方がいいであろう。

The flood subsides, and the body, like a worn sea-shell
emerges strange and lovely.

And the little ship wings home, faltering and lapsing
on the pink flood,
and the frail soul steps out, into her house again
filling the heart with peace.

Swings the heart renewed with peace
even of oblivion.

Oh build your ship of death, oh build it!
for you will need it.

For the voyage of oblivion awaits you. (*The Complete Poems* 720)

今は舟はもはやどこも知れぬ暗黒の中へと漂ってゆくのではなく、“pink flood” の語が象徴するように、生命を得てピンク色に染まった海原を帰ってゆく。そして生まれたばかりで、ちょっとした力で壊れてしまうような “frail soul” が、“her house” である肉体へと向かって勢いよく進んでゆく。ドレイパーも言うように、死は “a part of natural life, a purifier that destroys the old and makes way for the new.” (Draper 160) なのである。したがって、第3スタンザで、最後に念を押すかのように死の舟を造れと呼びかける。最終行 “For the voyage of oblivion awaits you.” には、

ロレンスに迫りくる死期の到来が重ね合わせられているかのようである。

おわりに

ロレンスがレイディ・オットライン・モレルに宛てた 1915 年 12 月 7 日付の手紙の中に次のような一節がある。

Why are you so sad about your life? Only let go all this will to have things in your own control. We must all submit to be helpless and obliterated, quite obliterated, destroyed, cast away into nothingness. There is something will rise out of it, something new, that now is not. This which we are must cease to be, that we may come to pass in another being. Do not struggle with your will, to dominate your conscious life—do not do it. Only drift, and let go—let go, entirely, and become dark, quite dark—like winter which mows away all the leaves and flowers, and lets only the dark underground roots remain. Let all the leaves and flowers and arborescent form of your life be cut off and cast away, all cut off and cast away, all the old life, so that only the deep roots remain in the darkness underground, and you have no place in the light, no place at all. Let all knots be broken, all bonds unloosed, all connections slackened and released, all released, like the trees which release their leaves, and the plants which die away utterly above ground, let go all their being and pass away, only sleep in the profound darkness where being takes place again.

Do not keep your will in your *conscious* self. Forget, utterly forget, and let go. Let your will lapse back into your unconscious self, so you move in a sleep, and in darkness, without sight or understanding. Only then you will act straight from the dark source of [. . .] life,

outwards, which is creative life.

I tell this to you, I tell it to myself—to let go, to release from my will everything that my will would hold, to lapse back into darkness and unknowing. There must be deep winter before there can be spring. . . . (The Letters of D. H. Lawrence II 468-69)

長々と引用したが、これはまさに手紙の形をとった “The Ship of Death” と言ってもいいのではないだろうか。ここでざっと “obliterated”, “destroyed”, “cease to be”, “die away utterly”, “something new”, “another being”, “being take place again” を拾っただけで、死と再生のイメージを読み取ることは容易である。冒頭、この詩がエトルリアのブロンズ製の死の舟にイメージを借りて書かれたとは言ったが、この一節から、すでにその15年近く前にロレンスの中にはきわめて明確な形で死と再生のイメージが作られていたことがわかる。さらに、たびたび援用した、彼の死論といってもいい “The Reality of Peace” が書かれたのが1917年であった。さらに早くには、1916年に出版されてはいるが1912年から1913年に草稿が書かれている *Twilight in Italy* の中でも、イタリア人が戦争に行くのは自分を解体して新たに生まれ変わりたいという欲求の裏返しだと言って、死と再生の考えを示唆している⁽¹⁰⁾し、1915年に書かれたエッセイ “The Crown” でも崩壊と再生のテーマは幾度も語られている。さらにまた1915年ごろに書かれた *Women in Love* ではアーシュラの死と再生が語られる⁽¹¹⁾。ここではまたバーキンが病気で寝込み回復する様子も描かれているが、これも死と再生の象徴と見てよいであろう。このようなことから、ロレンスの中には死と再生のイメージは早くから形成されていたことがわかる。ただこれらの時期は折りあたかも第一次世界大戦ということから、途方もない破壊行為である戦争がロレンスに暗い影を落としたと考えられるかもしれない。だが、ロレンス自身が最愛の母を失い、精神的にも肉体的にも死の中にあっただのが1910年ごろであり、その後フリーダという伴侶を得て死の底からはい上

がり、作家として歩み出したのが1913年頃であったことから、死という暗黒からの脱出のイメージが形成されたとも考えられる。さらに若い頃から虚弱であったロレンスは、おそらく常に死と隣り合わせにあったことであろう。それゆえに、ロレンスの中には常に死と再生というイメージは消えずに残っていたであろうし、それが実際多くの作品やエッセイにも反映されている。したがってこのようなことが背景となって、最後にエトルリアの死の舟と結びついたと言ってもよいであろう。

“only by death do we live” (*Phoenix* 681) とロレンスは言う。落果と萌芽に象徴される死と再生を繰り返すそのリズムの中に生きることこそ、ロレンスの「生」だったのである。今、迫り来る自分の死を見つめながらこの死をうたうことで、その「生」を生きようとしたと考えられるのである。

〔註〕

- (1) ロレンスがこの小さなブロンズ製の舟をこの詩の中心的なイメージとしたことは Pinto が次のように指摘している通りである。“This ‘little bronze ship of death’ became the central image of the longest and most ambitious of the last poems, “The Ship of Death”, on which he was working as he lay dying in the opening months of 1930 in the South of France.” *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, eds. Vivian de Sola Pinto and F. Warren Roberts (London: Heinemann, 1972) 19. また Tracy は以下のようにキリスト教とエトルリアの宗教との比較の上に「死の舟」がこの詩を書かせたとする。“Lawrence thought that Christianity had more often left people shipwrecked than on highground. In fact, the very failure of Christianity provide an adequate means of coping with death sent Lawrence on his search for another creed to take its place. The example of the ancient Etruscans gave him what the religion of his youth never could—the ability to face death courageously. . . . The Etruscan tombs gave Lawrence more than the principle image of *The Ship of Death* . . . they gave him the strength to write the poem.” *D. H. Lawrence and the Literature of Travel* (Michigan: UMI Research Press, 1983) 117-18.
- (2) たとえばフリーダが引用している “Do you see those leaves falling from

the apple tree? When the leaves want to fall you must let them fall.” (*Not I But the Wind* . . . 200) というロレンスの言葉も落果についての彼の考えを示唆している。

- (3) William Shakespeare, *Hamlet*, III. i. 77-78
- (4) *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, ed. Edward D. McDonald (New York: The Viking Press, 1972) 671. ここでロレンスは “There is a far sublimer courage than the courage of the indomitable will. It is not the courage of the man smiling contemptuously in the face of death that will save us all from death. It is the courage which yields himself implicitly to the suggestion which transcends him, when he accepts gently and honourably his own creative fate, he is beautiful and beyond aspersion.” といってしきりに、自分を越えた未知なる力に自分を預けるようにいぎなう。
- (5) Gen. 7. 4. “For yet seven days, and I will cause it to rain upon the earth forty days and forty nights; and every living substance that I have made will I destroy from off the face of the earth.”
- (6) ロレンスの手紙の中にこの場面を彷彿させる一節がある。 “And since then, since I came back, things have not existed for me. I have spoken to no one [. . .] I have touched no one, I have seen no one. All the while, I swear, my soul lay in the tomb—not dead, but with the flat stone over it, a corpse, I become corpse cold. And nobody existed, because I did nor exist myself. Yet I was not dead—only passed over—trespassé. And all the time I knew I should have to rise again.” (*The Letters of D. H. Lawrence* II 268-69) あるいはロレンスの言う一種の “Schöypferische Pause” (*The Letters of D. H. Lawrence* VI 122) といってもいいかもしれない。
- (7) これは “I must wait and always wait up for the stranger . . . I learn to wait and to watch” (*Phoenix* 697) あるいは “I must watch and wait. Like a blind man looking for the sun, I must lift my face to the unknown darkness for space and wait until the sun light on me” (*Phoenix* 698) のようにロレンスの未知なる力への信仰を表すものでもある。
- (8) “A deep, deep nausea stirred in him. . . .” (*The Man Who Died* 5)
- (9) Cipolla は青白い色から、灰色、黄色、バラ色への変化を “Perhaps after one of his feverish, sleepless nights, Lawrence had watched the sky over the Mediterranean undergoing this slow transformation. . . .” (115) と述べているが、たとえば “Coming as we did from the east side of the island,

where dawn beyond the Ionian sea is the day's great and familiar event : so decisive an event, that as the light appears along the sea's rim, so do my eyes invariably open and look at it, and know it is dawn, and as the night—purple is fused back, and a little scarlet thrills towards the zenith, invariably, day by day, I feel I must get up. . . . It [the sunset in the African sea] seemed much more magnificent and tragic than our Ionian dawn, which has always a suggestion of a flower opening . . . our Ionian dawn always seems near and familiar and happy.” (*Sea and Sardinia* 44) からも推測 できるように、ロレンスの中には再生（開花）と結びつけられる ような夜明けのイメージがすでにあったのではないかと思われる。

- (10) *Twilight in Italy* の中で “But also it is a desire to expose themselves to death, to know death, that death may destroy in them this too strong dominion of the blood, may once more liberate the spirit of outgoing, of uniting, of making order out of chaos, in the outer world, as the flesh makes a new order from chaos in begetting a new life, set them free to know and serve a greater idea.” (138) と述べている。
- (11) “As the day wore on, the life—blood seemed to ebb away from Ursula. . . .” (191) で始まる *Women in Love* の第15章ではアーシュラが死を象徴的に体験する様子が描かれている。またここでは “She could feel . . . the far-off awful nausea of dissolution set in within the body.” (192) とアーシュラも吐き気を感じているが、この場合は自我崩壊の象徴と見てよいであろう。

[引証資料]

- Cipolla, Elizabeth. “The Last Poems of D. H. Lawrence.” *The D.H. Lawrence Review*, Vol. 2, No. 2 (1969) : 103-119.
- Draper, Donald. *D. H. Lawrence*. New York : Twayne Publishers, Inc., 1964.
- Lawrence, D. H. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. Eds. Vivian de Sola Pinto and F. Warren Roberts. London : Heinemann, 1972.
- . “The Crown.” *Phoenix II : Uncollected, Unpublished, and Other Prose Works by D. H. Lawrence*. Eds. Warren Roberts and Harry T. Moor. New York : The Viking Press, 1973, 428-513.
- . *The Letters of D. H. Lawrence*, 7 Vols. Eds. James T. Boulton, George J. Zytaruk, Andrew Robertson, Warren Roberts, Elizabeth Mansfield, Lindeth Vasey, Margaret H. Boulton, Gerald M. Lacy and

- Keith Sagar. Cambridge : Cambridge University Press, 1979-1993.
- . *The Man Who Died. The Short Novels of D. H. Lawrence II*. London : Heinemann, 1972, 3-47.
- . “The Reality of Peace.” *Phoenix : The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York : The Viking Press, 1974, 763-805.
- . *Sea and Sardinia*. Cambridge : Cambridge University Press, 1997.
- . *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*. Cambridge : Cambridge University Press, 2002.
- . *Twilight in Italy and Other Essays*. Cambridge : Cambridge University Press, 2002.
- . *Women in Love*. Cambridge : Cambridge University Press, 1987.
- Lawrence, Frieda. *Not I, But the Wind*. . . . 1934. Southern Illinois University Press, 1974.
- Shakespeare, William. *Hamlet. The Complete Works*. Eds. Stanley Wells and Gay Taylor. Oxford : Clarendon Press, 1990.
- Tracy, Billy T. *D. H. Lawrence and the Literature of Travel*. Michigan : UMI Research Press, 1983.